

プラトン『パイドン』74b8-9の近年の解釈

——「τῶ μὲν…, τῶ δ' οὐ」の部分の翻訳について——

太田和則

1. はじめに：「τῶ（または τότε） μὲν…, τῶ（または τότε） δ' οὐ」の三つの翻訳案

本稿で私は、プラトン『パイドン』74b8-9における、ソクラテスの以下のような発言(S)に関する、近年の諸解釈の基本的な動向を解説する⁽¹⁾。

- (S) 「等しい諸々の石片や木片は、時として、同一のものでありながら、**或るものには等しいと現われ、別のものには等しくないと現われる**、ということがないだろうか？」
(ἀρ' οὐ λίθοι μὲν ἴσοι καὶ ξύλα ἐνίοτε ταυτὰ ὄντα τῶ μὲν ἴσα φαίνεται, τῶ δ' οὐ;)

この発言の解釈で特に問題となっているのは、太字で強調した「**或るものには…、別のものには…ない…**」（τῶ μὲν…, τῶ δ' οὐ）という部分をどう翻訳するかということである。その翻訳案としては、伝統的に、以下の二つがありうるとされてきた⁽²⁾。

- (a) 「或る人にとっては…、別の人にとっては…ない…」
（「τῶ μὲν…, τῶ δ' οὐ」を「φαίνεται」と共に読む）⁽³⁾
(b) 「或る物に対しては…、別の物に対しては…ない…」
（「τῶ μὲν…, τῶ δ' οὐ」を「ἴσα」と共に読む）⁽⁴⁾

ただし、当該の部分の原文を、「τῶ μὲν…, τῶ δ' οὐ」としてではなく、古くから知られている異本に従って「τότε μὲν…, τότε δ' οὐ」として読むこともしばしば試みられてきた。原文をこのように読む場合、翻訳は以下になる。

- (c) 「或る時には…、別の時には…ない」⁽⁵⁾

私の目的は、これら(a)～(c)の翻訳案のいずれを選ぶべきかという問題に関する近年の諸解釈の方向性を明らかにし、それらの背景や問題点について説明することにある。

(a)～(c)の選択の問題は、発言(S)の解釈との関わりを通じて、『パイドン』のアイデア論全

体の理解を左右すると考えられてきた。発言(S)によれば、等しい諸々の石片や木片はいかなる条件においてもそう現われるわけではなく、或る条件においては等しくないと現れることがある。ソクラテスはこの発言に続いて、それらの等しい事物と＜等＞のアイデアとが或る仕方で異なるということを論証しようとするのだが、(a)～(c)のいずれを選ぶかに応じて、ここでどのような差異が論証されようとしているのかということは、大きく異なっており理解されてきた。また、解釈上の通例として、『パイドン』はアイデア論の表明された最初期の対話篇だと見なされているが、それゆえに発言(S)の解釈および(a)～(c)の選択の問題は、アイデア論成立の背景をめぐるいささか大きな論争の題材にもなってきたのである⁶⁾。

このような事情により、(a)～(c)の選択の問題を扱う先行研究の数は非常に多く、それらの動向について述べている解説も既に豊富にある。けれども次のような近年の情勢は、今のところ十分に顧みられていないように私には思われる。それは、かつて 20 世紀後半には最有力な案と見なされる傾向にあった(b)が、90 年代から現在にかけては相次いで批判されるようになり、代わりに(a)や(c)が支持を集めてきているということである。以下では、こうした事柄についての説明を試みる。

本稿の構成は次の通りである。2 節では、以下における解説に先立ち、発言(S)の基本的な文脈となる 74b6-c6 の議論の内容や、それと(a)～(c)の選択との関わりについて、もう少し詳しく確認しておく。それを踏まえて 3 節では、(a)～(c)の選択に関する 20 世紀後半の伝統的な解釈の動向について説明する。そして 4 節では、以上で言及したような近年の動向を解説する。

2. テキスト

諸解釈について論じる前に、発言(S)が置かれている基本的な文脈を把握するため、この発言が含まれる 74b6-c6 の議論に目を通しておこう。議論の内容は、以下の日本語訳の通りである。念のため確認しておく、ここでは登場人物ソクラテスの問いに、別の人物シミアスが答えるという形式で議論が行われている。また、丸括弧でくくられた部分は、私が便宜的に挿入したものである。

(74b6-10)

「それとも君には、かの＜等＞そのもの (ἐκεῖνο, 74b6=αὐτὸ τὸ ἴσον, 74a12 (i. e. <等>のアイデア)) が等しい木片や石片とは異なるとはみえないかね? 次のようにも考えてくれ。諸々の等しい石片や木片は、時として、同一なものでありながら、或るもの (または或る時) には等しいと現われ、別のもの (または別の時) には等しくないと

現われる、ということがないだろうか？」

「全くもってあります」

(74c1-3)

「ではどうだ、＜等＞そのもの (αὐτὰ τὰ ἴσα (i. e. <等>のアイデア)) が⁽⁷⁾、君に (σοι) 一度でも等しくないと現れた (ἐφάνη) ことはあるか？つまり＜等＞という性質 (ἡ ἰσότης) が＜不等＞という性質 (ἄνισότης) として現れたことがあるか？」

「いいえ、一度たりともありません、ソクラテス」

(74c4-6)

「それなら」とあの方は言われた、「それらの等しい木片や石片と＜等＞そのものは、同一でないのだ」

「私には、決して、同一であるとは見えません、ソクラテス」

ソクラテスはこの議論によって、等しい諸々の石片や木片と＜等＞のアイデアとが異なるということを論証しようとしている。しかし解釈において問題となるのは、それらがどのような仕方で異なるかということである。

この問題について説明するため、議論を三つのやり取りに分けて考えよう。第一に、発言(S)を含む74b6-10。ここでは、「等しい諸々の石片や木片は、時として、同一なままでありながら、或るもの（または或る時）には等しいと現われ、別のもの（または別の時）には等しくないと現われる」ということが同意される。第二に74c1-3。ここでは、＜等＞のアイデアが、等しくないと「君」（ここではシミアスのこと）に現われたことは一度もない、ということが同意される。第三に74c4-6。ここでは、以上の二つのやり取りを踏まえて、諸々の等しい石片や木片と＜等＞のアイデアとは同一でない、ということが結論される。

特に重要になるのは、第一と第二のやり取りである。その内容をまとめて大まかにパラフレーズすると、等しい諸々の石片や木片は或る仕方では等しくないと現われることがあるが、＜等＞のアイデアはその仕方では等しくないと現われることがない、ということになる。この内容の意味は、(a)～(c)の選択に応じて、次のように異なって理解される。まず(a)を選んだ場合、等しい諸々の石片や木片は、或る視点（言い換えれば、或るパースペクティブ）の下では等しくないと現われることがあるが、＜等＞のアイデアはいかなる視点の下でも等しくないと現われることがない。次に(b)を選んだ場合、等しい諸々の石片や木片は、或る物に対する関係においては等しくないと現われることがあるが、＜等＞のアイデアはい

かなる物に対する関係においても等しくないと現われることがない。そして(c)を選んだ場合、等しい諸々の石片や木片は、或る時には等しくないと現われることがあるが、＜等＞のアイデアはいかなる時にも等しくないと現われることがない。かくして(a)～(c)の選択は、発言(S)を含む 74b6-c6 の議論の解釈に決定的な影響を及ぼすのである。

以上を踏まえた上で、諸解釈の解説に移ることにしよう。

3 伝統的な解釈の動向

3.1 (c) への批判

ひとまず、伝統的に特に重要視されてきたのは、(a)か(b)かの選択であったと言える。少なくとも 20 世紀の間、(a)や(b)に比べて、(c)が肯定的に評価されることは少なかった⁽⁸⁾。その理由は、(c)を選ぶことの困難が既によく知られていたということにある。例えば既に 19 世紀に、Archer-Hind(1894, p. 37)が、次のような二つの論点にもとづいて(c)を批判していた。その批判は現在でもしばしば有力だと評価されている⁽⁹⁾。まず、(c)を選ぶためには、敢えて最有力でない写本を採用しなければならないということ。そして、(c)を選んだ場合には、翻訳上、発言(S)の内容が冗長になるということである（何故なら発言(S)によれば、等しい諸々の石片や木片は「時として (ἐνίοτε)、…等しいと現われ、…等しくないと現われる」ということであるが、(c)を選んだ場合、これは「時として…或る時には等しいと現われ、別の時には等しくないと現われる」という意味になるからである)。

3.2 (a) への批判

次に、(a)と(b)とでは、20 世紀前半までの傾向としては、(a)の方が選ばれることが多かった。しかし 20 世紀後半には、(a)に対してMurphy(1951, p. 111, n. 1)が提出した批判に多くの解釈者が賛成し、(b)を選ぶようになった。この事情については、既存の幾つかの解説において詳しく論じられているけれども、このあと近年の解釈について論じる前に踏まえておくべき点が多くあるので、必要な程度に解説しておくことにする⁽¹⁰⁾。

(a)にMurphyが提出した批判は次のようなものであった。(a)を選んだ場合、発言(S)を含む 74b6-c6 の議論は、それが示そうとしている事柄に關して的外れになる。何故ならその場合、発言(S)は「諸々の等しい石片や木片は…或る人には等しいと現われ、別の人には等しくないと現われる、ということがないだろうか？」という意味になるが、それらの等しい事物が「或る人には等しいと現われ、別の人には等しくないと現われる」ことから推論できるのは、せいぜい、異なる現われを体験する二人のうち片方が誤っていたということに過ぎないからである⁽¹¹⁾。

Murphyによれば、74b6-c6においてソクラテスが論じようとしていることはむしろ、諸々の木片や石片は異なる物との関係で或る対比的な述語（*contrasted predicates*、「等しい」と「等しくない」など）を有するけれど、＜等＞そのものはそうでないということである⁽¹²⁾。この解釈に合致する翻訳案として、Murphyは(b)を選んだ。そしてこれ以来、多くの解釈者たちが、大まかに言えば同様の思考の線において、(a)を退け(b)を選んできた。

また、これに関係して、(b)を選ぶ解釈者たちが注目してきたのは、等しい石片や木片が「現われる」（*φαίνεται*, 74b8）ということの意味である。まず、発言(S)におけるギリシア語「*φαίνεται*」の意味としては、以下の二つがありうることを念頭に置いておこう。

- (i) 「等しい（または等しくない）とみえる」とか、
「等しい（または等しくない）と思われる」
（「*φαίνεται*」に対し、「ある」と翻訳できる動詞の不定詞「*εἶναι*」を補って読む）
- (ii) 「明らかに等しい（または等しくない）」
（「*φαίνεται*」に対し、「ある」と翻訳できる動詞の分詞「*ὄντα*」を補って読む）

これらの二つの意味は、「等しい（または等しくない）」という事態が事実であるか否かということに関係して異なる。(i)の意味の「現れる」の場合、いわゆる主観的判断のように、たとえ「等しい（または等しくない）」という事態が事実でないとしても、「等しい（または等しくない）と現われる」ことが成立しうる。つまり、「等しい（または等しくない）と現われる」ことにとって、「等しい（または等しくない）」という事態が事実である必要はない。これに対して、(ii)の意味の「現われる」の場合、もし「等しい（または等しくない）」という事態が事実でないとしたら、「等しい（または等しくない）と現われる」こと自体が不可能である。言い換えれば、「等しい（等しくない）と現われる」ことにとって、「等しい（または等しくない）」という事態は事実である必要がある。

20世紀後半の解釈者たちの多くは、「現われる」の意味はこの二つのいずれかだと考え、その上で(ii)の意味が適当だと理解してきた。何故なら、仮に(i)の意味で理解するならば、原理上は(a)～(c)のいずれを採用しようと、Murphyが提出したような批判によって攻撃されうることになるからである。もし等しい諸々の石片や木片が「或るもの（または或る時）には等しいと現われ、別の人（または別の時）には等しくないと現われる」というケースのうちに、「或るもの（または或る時）には等しいと現われ、別の人（または別の時）には（事実としては等しいのに）等しくないと誤って現れる」というケースが含まれうるとすれば、発言(S)をもとに推論されるのは、せいぜい、異なる現われを体験する二人のうち片

方が誤っていたということに過ぎない、ということになりかねないであろう。

(i)か(ii)か、という問題に関するこのような解釈の動向は、(a)か(b)かの選択にも影響を与えた。具体的には、(b)の採用をいっそう推進させることになった。その理由は、(i)が(a)と、(ii)が(b)と、内容において強く結びついていたことにある。例えば、(a)を選んだ場合、発言(S)によれば、等しい諸々の石片や木片は、或る視点の下では等しくないと現われることがある。この場合の「現われる」の意味は、「等しい（または等しくない）」という事態が特定の誰かにとって見えたり思われたりするだけだという(i)の意味で理解されることが自然である。他方で(b)を選んだ場合、発言(S)によれば、等しい諸々の石片や木片は、或る物に対する関係においては等しくないと現われることがある。この場合の「現われる」の意味は、「等しい（または等しくない）」という事態が事実であることを含意する(ii)の意味で理解されることが自然である。かくして解釈者たちは、「現われる」の意味の解釈の観点からも、(b)を選ぶべきだということを主張してきた。

4 近年の解釈の動向

4.1 (b)への批判

ところが20世紀末以降、特に90年代以降において、(b)には批判が相次いでおり、肯定的に評価されることが少なくなっている⁽¹³⁾。

伝統的にも、(b)に困難があることは指摘されてきた。例えば、第一に、等しい諸々の石片や木片のいずれも常に何かに対しては等しくないはずであるのに、そのことが「時として」(ἐνίοτε, 74b8) 成り立つと言われていることになる。第二に、<等>のアイデアさえ、少なくとも何ものかに対しては等しくないと現われる可能性は、認めざるをえない。第三に、発言(S)を含む74b6-c6の議論は、「美しい」や「善い」といった他の諸々の事態に関しても当てはまることが『パイドン』の後の箇所で示唆されているが(75c11-d1)、それにも関わらず、議論は「(或る物に対しては)等しい」のような関係的な事態にしか妥当しなくなる。第四に、発言(S)において、複数形を用いて「諸々の等しい石片や木片は…或るものには等しいと現われ」と言われていることは、石片や木片が既に「互いに等しい」関係にあることを示唆しているから、それら以外の物に対してさらに等しいと現われるか否かということ、不自然にも問うことになる⁽¹⁴⁾。

これらの全てが致命的な困難であるか否かは不明である。しかしその少なくとも一部が近年に再び注目を集め、(b)を批判する根拠になってきていることは確かだと言える⁽¹⁵⁾。

また、これらとは別の観点からの批判も提出されてきている。例えば、中畑(1993, p. 90)によれば、「τῶ μὲν…, τῶ δ' οὐ」とパラレルな表現は『ヒippias(大)』291d1-3や『饗宴』

211a2-5 などにあるが、いずれも「或る人にとって…」という意味で用いられている。それだけでなく、『饗宴』では、そのような表現が、特定のものととの関係を表す「πρὸς μὲν…, πρὸς δὲ…」と区別されて用いられている。次に、Dimas(2003, pp. 196-197)によれば、(b)を選んだ場合、或る物に対して等しいと現れる限りの感覚対象と<等>のアイデアとでは、区別がつかなくなるという問題が生じる。さらに、Sedley(2007, p. 80)によれば、「現われる」の意味を、(b)と連動するところの(ii)として理解すべきではない⁽¹⁶⁾。何故なら、本稿の2節で見たような74c1-3のやり取りでは、等しい諸々の石片や木片には成り立つ「等しくない」と現われる」ということが<等>のアイデアには成り立たないことが同意されるが、その同意は、「君にとって(σου)、…一度でも等しくない」と現れた(ἐφάνη) ことがあるか?」という問いを通して得られているからである。Sedleyによると、このことは、「等しい(または等しくない)と現われる」ことが「君」(ここではシミアスのこと)のような特定の人に関連付けられる意味であることを示しており、直前の発言(S)における「現われる」の意味を(ii)として理解することができないことを示唆している。朴(2007, p. 213, n. 1)やSvavarsson(2009, pp. 70-71)によれば、(ii)に不利に働く別の事情もある。発言(S)を含む74b6-c6の議論の直後、74d5-7にある、以下の発言に注目しよう。

「ではどうか」とあの方は言われた、「木材や、我々が今しがた語っていた諸々の事物の場合に関して、我々は何か次のようなことを経験するのではないか? 果たしてそれらは、我々にとって、等しくあるものそのものとちょうど同程度に等しいと現われるだろうか、…」

(Τί δέ; ἢ δ' ὅς. ἢ πάσχομέν τι τοιοῦτον περὶ τὰ ἐν τοῖς ξύλοις τε καὶ οἷς νυνδὴ ἐλέγομεν τοῖς ἴσοις; ἄρα φαίνεται ἡμῖν οὕτως ἴσα εἶναι ὥσπερ αὐτὸ τὸ ὅ ἐστιν ἴσον, …)

この発言において「等しいと現われる」は明らかに不定詞「εἶναι」を伴っている。それゆえ、そのすぐ前にある発言(S)における「現われる」の意味として、(i)ではなく(ii)を採用するということは困難である。また Svavarsson(2009, pp. 65, 70)は、次のようにも指摘している。発言(S)を含む74b6-c6の議論において、等しい諸々の石片や木片と<等>のアイデアとの区別は まさに(i)において理解されるように、それらのものが、或る種の認識の対象として異なるという意味で区別されている。と言うのも、当該の議論は、発言(S)の直前にある「我々はどこからそれ(<等>そのもの)の知識を把握したのだろうか?」(74b4)という疑問に答えるステップの一つとして行われているからである。

4.2 (a) と (c) の再評価

さて、かくして(b)への批判が起こっていることと平行して、(a)が伝統的に被ってきた批判に対しては、幾つかの反論が提出されてきている。そして興味深いことに、最近では(c)を選ぶ解釈者も再び登場し始めている。(a)と(c)は、(b)とは対照的に、再評価されてきていると言える。

まず、(a)に関して。例えば、この翻訳案を選ぶ中畑(1993, pp. 91-92)は、「現われる」の意味を(i)か(ii)のどちらかに限定する必要はないとして、Murphy のような批判に反論している。中畑によれば、テキスト上は、発言(S)および 74c1-3 のやり取りにおける「現われる」(φαίνεται, ἐφάνη) には、不定詞も分詞も付け加えられていないし、そもそも「～と現われる」の意味を、「～と見える・思われる」と「明らかに～である」のどちらかに限定する必要はない。確かに、もし主観的判断のように「等しい (または等しくない)」という事態とは独立に成立する把握として「現われる」の意味を解釈するとすれば、Murphy のような批判は妥当する。議論が明白な失態を犯していない限り、発言(S)における「現われる」の意味は、「等しい (または等しくない)」という事態が事実であることを何らかの仕方で示しているのだからなければならない。けれども、だからと言って(ii)の意味で理解する必要はない——と中畑は論じる。それによれば、等しい (または等しくない) と「現われる」ということ自体を、あるいは、もっと言えば、「或る人にとっては等しい (または等しくない) と現われる」ということ自体を、いわゆる主観的判断のように、事実から独立した認識として理解する必要はない。現われというものは、常に、特定の人にとって成立するのであり、そうしたパースペクティヴの下に常に置かれているけれども、認識が特定のパースペクティヴの下に置かれていることと、主観的判断のように事態から独立に成立していることとは、別問題だからである。それゆえ、(a)を選んだ場合に、等しい諸々の石片や木片と<等>のアイデアとは、前者が常に特定のパースペクティヴの下に置かれているのに対して、後者はそうでないということで区別されるに過ぎない——中畑はこのように反論している。

瀬口(2002, pp. 17-18)もこれに類似した反論を提出している。瀬口によれば、発言(S)を含む 74b6-c6 の議論では、異なる現われを体験する二人の片方が錯覚しているというのではなく、知覚の働きそのものが特定の主体と相対的だということが論じられている。それゆえ、そうした特定の視点から独立に、客観的に知覚対象が存在するという想定は、元から排除されている。しかし Murphy のような批判は、テキストにはないそのような想定にもとづいて提出されたものであるということを瀬口は論じる。

他方で、朴(2007, p. 213)や Svavarsson(2009, pp. 69-72)のように、「現われる」の意味を積

極的に(i)として理解できると論じる解釈者もいる。彼らによれば、Murphyのような批判の妥当性を考える以前に、発言(S)に関して(a)-(i)という簡明な筋の解釈を採用できることは、本稿の4.1節で見た74d5-7のような箇所にもとづき、明らかである。

次に(c)に関して。かくして(a)が評価されてきている一方で、最近では、(c)を選ぶことも再び試みられてきている。以下ではそうした試みの例として、比較的詳細な議論を行っているSedleyの議論を紹介する。

Sedleyはまず、本稿の4.1節で見たような伝統的な問題点に関して(b)の可能性を退け、その次に、(a)の可能性も退けることを試みる。Sedleyによれば、(a)を選んだ場合、発言(S)を含む74b6-c6の議論は、以下のようにパラフレーズできる。

(74b6-10)

等しい諸々の石片や木片は、或る人にとっては等しいと現われ、別の人にとっては等しくないといわれる。

(74c1-3)

君にとって(σοι) <等>のアイデアは常に等しいと現れる。

(74c4-6)

従って、等しい諸々の石片や木片と<等>のアイデアは同一でない。

Sedleyは、この議論には誤謬推論の疑いがあると指摘する。それによれば、ここで議論されていることはせいぜい、等しい諸々の石片や木片には「或る人にとっては等しいと現われ、別の人にとっては等しくないと現われる」という点で*inter-subjective*な相対性があり、一方<等>のアイデアには「君には…常に等しいと現れる」という点で*intra-subjective*な相対性がない、ということに過ぎない。それらの事物とアイデアとが同一でないことは、このような違いからは導けない。何故なら、「君」（ここではシミアスのこと）という特定の人の視点に限って言えば、<等>のアイデアの他にも、常に等しいと現れる石片や木片があるかもしれないからである⁽¹⁷⁾。

次にSedley(2009, pp. 79-80)は、かつてArcher-Hindが(c)を批判した際の二つの論点を退けることを試みる。それらの論点とは、「τότε μὲν…, τότε δ' οὐ」という異本の採用を必要とするということ、そして、発言(S)の内容が冗長になるということであった。これに対し

て Sedley はまず、実際は「τότε μὲν…, τότε δ' οὐ」を読む写本の方が有力である、という大胆な主張を行う。例えば、Duke らの校訂による新版の『パイドン』のテキストは、確かに「τῶ μὲν…, τῶ δ' οὐ」を読む写本を最有力としているけれど、Duke ら自身は、写本のグループとしては「τότε μὲν…, τότε δ' οὐ」を読むものの方が多いことを脚注で示していると Sedley は指摘する。また Sedley は、(c)を選んだ場合に発言(S)の内容が多少ぎこちなくなるということは認めるけれども、そのことは(c)を退ける十分な理由にはならない、と主張する。Sedley によれば、「時として…或る時には等しいと現われ、別の時には等しくないと現われる」ということは、「…或る時には等しいと現われ、別の時には等しくないと現われる、という場合がある」という意味で理解することができる。例えば、或る主体が諸々の石片や木片を見る視点が或る一定時間内に変わる場合には、それらの石片や木片が「或る時には等しいと現われ、別の時には等しくないと現われる」ということがありうるけれど、視点が変わらない場合には、石片や木片の現われも変化しないであろう。発言(S)における「時として」(ἐνίοτε) は、そのような事柄に関する断り書きとして理解することができるということである。また Sedley によれば、そもそも、発言(S)の内容が多少ぎこちないと思われたがゆえに、一部の写本では「τότε μὲν…, τότε δ' οὐ」が「τῶ μὲν…, τῶ δ' οὐ」に変えられてしまったという可能性があり、この推察が正しいとすれば、(c)を選んだ場合の表現上の困難はむしろ「τότε μὲν…, τότε δ' οὐ」を読む写本を有力視する別の理由になりうるのである。

しかし興味深いことに、Sedleyは(c)を選ぶにも関わらず、発言(S)の解釈としては、(a)を採用する解釈者たちと大筋で同じ方針をとっている。と言うのもSedleyは、本稿の4.1節で言及した「君にとって」(σοι, 74c1)の問題に着目して(ii)を退け、そのうえで(i)を採用するからである。実際、上記のSedleyの解釈からも読み取れるように、彼によれば、等しい諸々の石片や木片が「或る時には等しいと現われ、別の時には等しくないと現われる」という場合の代表例は、それらが現われるところの主体の視点が変化する場合である。Sedleyの解釈は、或る意味では、(a)を選んだ場合の解釈を含んでいると言える⁽¹⁸⁾

ただし、Sedley 独自の次のような主張についても注記しておくべきであろう。Sedley によれば、発言(S)の内容は、等しい諸々の石片や木片は或る時には等しいと現れるが、別の時には**実際は等しいのに等しくないと誤って現れることがある**、という意味で理解される。つまり、石片や木片の現れの中には現に誤っているものがあるということである。このように解釈する根拠として Sedley(2009, p. 81)は、74b5 や b7-8 において、石片や木片が**等しい石片や木片**として明白に記述されていることを指摘し、それらの事物は、或る意味で現われ以前に、客観的な事態として等しいということが認定されている、と主張している。

5 おわりに

かくして(a)～(c)の選択の問題は、近年に新しい局面を迎えている。これまで見てきたように、Murphy による(a)への批判以降、伝統的には(b)が有力視されてきたが、近年ではむしろこの案の方に批判が集まるようになり、代わりに(a)や(c)が再評価されてきている。

しかし最後に、次のことを述べておかなければならない。それは、(a)や(c)が再評価されてきているにも関わらず、Murphyのような批判において指摘された議論の問題そのものは、必ずしも解消されていないということである。その問題とは、等しい石片や木片が「或る人には等しいと現われ、別の人には等しくないと現われる」ことから推論できるのは、異なる現われを体験する二人の片方が誤っていたということに過ぎない、ということであった。近年の解釈者のうち、例えばSedleyや朴やSvavarssonのような人々は、「等しい（または等しくないと現われる）」の意味を積極的に(i)として理解するけれども、Murphyに賛成する解釈者たちが(b)-(ii)の筋の解釈によって回避しようとした、このような問題自体を解消するには至っていないと思われる。「現われる」の意味が(i)であるからと言って、発言(S)を含む 74b6-c6 の議論が、現にそうした問題を孕んだ仕方で行われているという解釈は受け入れざるをえないのかもしれない⁽¹⁹⁾。「現われる」の意味を(i)にも(ii)にも限定せず、現われと実際の事態とのより強い結びつきを想定する解釈に関しても、同様のことが言えるであろう。例えば、等しい石片や木片が等しい（または等しくないと現われることが、常に特定の主体の視点のもとに置かれているとすれば、「これらの石片や木片は等しい（または等しくないと現われる）」と言明する場合の真偽を判断する根拠はどこにあるのだろうか。中畑(1993, pp. 95-96)は、『パイドン』や『国家』に代表される中期対話編において、こうした疑問に適切に答えるだけの理論的道具立てはプラトンになかったのではないかと述べ、議論そのものが或る意味で問題的であるという見解をはっきりと示唆している。

註

- (1) 『パイドン』の原文に関して、本稿では基本的に Duke らの校訂によるテキストを参考とした。
- (2) これに加えて、「或る点では…、別の点では…ない」という翻訳案が支持されたこともある。例えば Haynes(1964)。しかし、これは翻訳として不自然だという評価が一般的である。例えば、瀬口(2002, p. 16)を参照。
- (3) 近年では、中畑(1993)、瀬口(2002)、朴(2007)、Dimas(2003)、Svavarsson(2009)など。
- (4) 近年では、Rowe(1993)や Flanklin(2005)など。
- (5) 近年では、Dancy(2004)や Sedley(2007)など。
- (6) 詳しくは、中畑(1993)を参照。
- (7) この文章に見られる複数形の「<等>そのもの」については諸説あるが、近年では、単数形の場合や「<等>という性質」と同様に、<等>のアイデアを指すという解釈が一般的である。この表現の解釈の問題については、朴(2007, p. 213, pp. 347-354)を参照。

- (8) Burnet(1911)((a)の可能性も認める)や Tarrant(1957)や Verdenius(1958)などは、(c)の可能性を認めていた。
- (9) 例えば、瀬口(2002, p. 16)や Svavarsson(2009, p. 68)を参照。
- (10) 本節の以下の内容は、基本的にも中畑(1993, pp. 88-90)による解説に依拠している。
- (11) Sedley(2007, p. 78)の「エベレスト三段論法」の例を用いた(a)への批判も、Murphy による批判と同様の着眼点を有していると言える。
- (12) Murphy(1951, p. 111)はこの解釈にもとづき、『国家』V 巻最終部における「多くの美しいもの」(πολλὰ τὰ καλὰ) に代表される感覚対象についてのプラトンの議論は、『パイドン』の当該部分の議論によって予期されていると指摘している。『国家』V 巻の議論との関連性は、Bostock(1986, pp. 75-77)によっても注目され、(b)を選ぶ根拠になると解釈されている。しかし Svavarsson(2009, pp. 73-74)はこれに反対している。
- (13) 最近では、例えば Franklin(2005, p. 304)。ただし Svavarsson(2009, p. 69, n. 29)はこれに反対している。
- (14) 基本的に瀬口(2002, pp. 15-16)の解説に依拠している。
- (15) 例えば、中畑(1993, pp. 90-91)や瀬口(2002, pp. 15-17)や Sedley(2007, p. 76)や Svavarsson(2009, pp. 68)。
- (16) ただし、Sedley は(b)と(ii)との連動を特に前提はしていないので、これを Sedley 自身による(b)への批判と呼ぶことは正しくないであろう。
- (17) Sedley(2007, pp. 77-78)を参照。これに対してありうる反論は、当該の箇所においては「君」が人々一般の代表者として意見を求められている、と解釈すればよいというものである(例えば、瀬口(2002, p. 17))。しかし Sedley は、そのような事情を原文から読み取ることとはほぼ不可能だと述べる。
- (18) Dancy(2004, p. 267, n. 22)でも、(c)における解釈は(a)における解釈を含むということが論じられている。
- (19) そのことを Sedley(2009, pp. 81-82)は認めていると言える。

文献

- Archer-Hind, R. D. (1894). *The Plato of Paedo*, New Hampshire: Ayer Company.
- Burnet, J. (1911). *Plato's Phaedo*, Oxford: Oxford University Press.
- Bostock, D. (1986). *Plato's Phaedo*, Oxford: Oxford University Press.
- Dancy, R. M. (2004). *Plato's Introduction of Forms*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Dimas, P. (2003). 'Recollecting Forms in the *Phaedo*', *Phronesis*, 48, 175-214.
- Franklin, L. (2005). 'Recollection and philosophical reflection in Plato's *phaedo*', *Phronesis*, 50, 289-314.
- Haynes, R. D. (1964). 'The form equality, as a set of equals: *Phaedo* 74 b-c', *Phronesis*, 9, 17-26.
- Murphy, N. R. (1951). *The interpretation of Plato's Republic*, Oxford: Oxford University Press.
- 中畑正志 (1993). 「相反する現われ——イデア論生成への一視点——」, 森俊洋・中畑正志編, 『プラトンの探求』(81-100 頁), 九州大学出版会.
- 朴一功 (2007). 『饗宴／パイドン』, 京都大学学術出版会.
- Rowe, C. J. (1993). *Plato: Phaedo*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Sedley, D. (2007). 'Equal Sticks and Stones', in D. Scott(Ed), *Maieusis: Essays in Ancient Philosophy in Honour of Myles Burnyeat*. (pp. 69-86), Oxford University Press.
- 瀬口昌久 (2002). 『魂と世界——プラトンの反二元論的世界像』, 京都大学学術出版会.
- Svavarsson, S. (2009). 'Plato on Forms And Conflicting Appearances: the Argument of *Phaedo* 74a9-c6', *Classical Quarterly*, 59, 60-74.
- Tarrant, D. (1957). 'Plato's *Phaedo* 74 A-B', *Journal of Hellenic studies*, 77, 124-126.
- Verdenius, W. J. (1958). 'Notes on Plato's *Phaedo*', *Mnemosyne*, 2, 124-126.

〔京都大学大学院博士課程・西洋哲学史〕